



井上正鑑氏寄贈のアルバム(高岡小学校所蔵)

今から10年前、高岡小学校創立120周年に際し同校に残る古い写真の整理をした元下総歴史民俗資料館長の磯辺大暢さんは、戦前の航空機や羽田飛行場、東京上空からの航空写真など50点が収められた1冊のアルバムを発見しました。アルバムの撮影者は南部信鑑(のちの井上正鑑)。彼はアメリカのライト兄弟の飛行を活動写真で見て飛行機に憧れ、わが国の民間航空の草創期・発展期に活躍した飛行家の一人です。しかし、彼の名前は飛行機好きな人以外にはあまり知られていません。

信鑑は明治32年6月27日、八戸藩(青森県)の藩主だった子爵・南部利克の二男として東京で生まれ、昭和3年5月に下総旧高岡藩主の井上家に婿入りし井上正鑑と改名。信鑑から正鑑に名前が変わった理由は、井上家の相続人は名前に代々「正」の字を付けるからです。

磯辺さんは高岡藩の研究調査を進める中で信鑑と親交を深め、何回となく直接お話を聞いたことがあるそうです。磯辺さんは「長男・信克も飛行機好きでしたが、華族の嫡子が危険な飛行家になることは認められず信鑑だけが許されました。少年時代から飛行機とカメラに夢中

大正11年、伊藤飛行機研究所を卒業したときの「卒業證書」(下総歴史民俗資料館所蔵)



で、自分を飛行機狂と言っていましたね。休日のたびに友人と東京から夜通し歩いて所沢の陸軍飛行場まで通い、そこで日本のパイロット第1号である徳川好敏大尉と親しくなって飛行機に乗せてもらったり、大正5年ごろ、青山連兵場でアメリカの曲芸飛行家アート・スミスの写真を撮ったこともあったそうです」と、信鑑の飛行機に対する思い入れの強さを窺わせるエピソードを語ってくれました。また、信鑑は年に一度、秋の彼岸の日には高岡に来ていたということで、高岡を「お国」と呼び、こよなく愛していたようです。

大正10年、日本航空界のパイオニアの一人である伊藤音次郎(戦後は成田で暮らす)の経営する伊藤飛行機研究所に入所し、本格的に操縦の練習を開始。翌年10月に卒業、3等飛行機操縦士の免状を取得し、少年時代から夢見ていたパイロットの道を歩み出したのは、信鑑が23歳の秋でした。しかし、大空を飛び続ける日々はそう長くは続きませんでした。(次回に続く)



懸賞飛行機競技会に参加し3等賞を受賞(大正12年6月、下総歴史民俗資料館所蔵)

成田 歴史 成田 玉手箱

●70回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

高岡を「お国」と呼び、高岡をこよなく愛した飛行家

空飛ぶ高岡藩主の子孫 井上正鑑(前編)

編集後記

約87万人。昨年から今年にかけて実施されてきた合併記念全57事業の参加者総数です。この間、いろいろな場所に取材でお邪魔しましたが、山車の上から写真を撮った「公津みらい2006公和祭」や、印旛沼を鮮やかに彩った「NARITA花火大会in印旛沼」などが特に印象深く思い出されます。両事業のように、地域住民が一致団結して新たに催されたものも多くあり、継続開催の話も出ていたりとか。新「成田市」は、3月27日の市民の日フェスティバルでめでたく1周年を迎えました。今後は、さらに一体となった成田をお伝えできるよう、スタッフ一同、フットワーク軽く飛び回ります。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。